

寂蓮の私撰和歌集入集歌について

—『雲葉和歌集』『拾遺風躰和歌集』『二八要抄』『六華和歌集』『新三井和歌集』を中心として—

半田公平

—

寂蓮の私撰和歌集入集歌は、生存時の作品として『言葉¹和歌集』『月詣和歌集』『玄玉和歌集』がある。入滅後成立の作品は数多くあり、『御裳濯和歌集』を初めとして『万代和歌集』『雲葉和歌集』『夫木和歌抄』『拾遺風躰和歌集』『二八要抄』『六華和歌集』『新三井和歌集』『光俊集』『後葉和歌集』等がある。その他、『題林愚抄』『明題和歌全集』を資料として成立した個人名を冠した私撰集である、『資賢集』『為兼前集』『元可集』『義満公集』『濟繼集』等、また、『明題拾要抄』『類題和歌集』等に入集している。

寂蓮の私撰和歌集入集歌の内、一部の作品については別稿¹において考察を加えた。本稿では表題の五私撰集を採りあげ考察を加える。最初にそれぞれの私撰集の従来の研究を基として、作品の撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで拙著²において考察を加えなかった、それぞれの私撰集のみ入集の独自歌について、詠歌年時、出典、歌意、本歌取歌、影響歌等についてみる。引用の和歌は『新編国歌大観』所収本に拠り、寂蓮歌の私撰集入集番号を歌頭に『新編国歌大観本』に

一 扱って示した。

二 『雲葉和歌集』

この作品の従来の研究については、久曾神昇⁽³⁾・安井久善⁽⁴⁾・樋口芳麻呂⁽⁵⁾・有吉保⁽⁶⁾・黒田彰子⁽⁷⁾・大伏春美⁽⁸⁾・佐藤恒雄⁽⁹⁾・後藤重郎⁽¹⁰⁾・安田徳子⁽¹⁰⁾・池尾和也⁽¹¹⁾・拙著⁽¹²⁾等の各氏に扱って考察されている。撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

撰者は、九条内大臣藤原基家である。『代集』に「打聞 雲葉集 九条前内大臣撰」とあり、『前長門守時朝入京田舎打聞集』に、

雲葉集に入る歌 二首 九条前内大臣家撰

秋歌の中に

三 ねやちかくなきつる虫のあかつきはたれにならひてとほざかるらん

百首歌の中に

四 こゆるぎのいそのいはねに波こえてからぬみるめはほすひまもなし

とある。また、弘長元年（一二六一）七月七日『宗尊親王百五十番歌合』の百九番の判詞に、

右、ふる雪の晴れゆくあとのなみのうへにのこれる雪やあまのつり舟、とよめる歌に相似るにや、此歌は雲葉の冬部にしるし入れて侍り、然れば左勝つべくや」

とあり、この歌合の判者は基家であり、以上のことなどから基家撰とされている。

基家は建仁三年（一二〇三）に生まれ、弘安三年（一二八〇）七月十一日、七八歳で没した。父は後京極摂政良経。母は松殿関白基房女。鶴殿と号し、後九条内大臣と称された。承久三年（一二二二）正二位、嘉禎三年（一二三七）内大臣に至

る。貞永元年（一二三二）『石清水若宮歌合』『光明峯寺撰政家歌合』『洞院撰政家百首』等に出詠。『建長八年九月十三夜百首歌合』を主催、真観等と共に判者を勤め、弘長元年（一二六一）『宗尊親王家百五十番歌合』の判者、『弘長百首』の作者となり、同二年には『続古今和歌集』の撰者の一人となり、文永二年（一二六五）に撰進した。二条派の為家に対抗する反御子左派に属した。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に七九首入集している。

成立は、所収歌の最下限、巻九・賀・九〇四番歌に

建長五年三月にはじめて天王寺へ御幸侍りけるついでに、すみのえにて人人歌つかうまつりしとき 院御製

あとたれし神よにうゑばすみよしのまつもちとせをすぎにけらしも

の歌及び、藤原成実を「正三位成実」と表記し、成実が従二位に叙せられた建長六年（一二五四）三月八日以前等から、建長五年（一二五三）三月から同六年三月までの間の成立と推定されている。

内容、部立は、春（上・中・下）・夏・秋（上・中・下）・冬・賀・羈旅の十巻から成っているが、彰考館本には巻十五（恋五）が付載されていて、現存十一巻、一〇三二首である。しかし、『夫木和歌抄』等によって、巻十一以降に収載されていたと思われる歌が三十余首蒐集され、それらの歌の内容から、巻十一以降は、恋（一〜五）・雑（上・中・下）・神祇・釈教の二十巻から成る撰集であったと推定されている。

入集歌人は、現存本に拠ると、奈良時代以降より当代の歌人二八七名の作を撰入する。第一位は撰者基家の父良経で三六首、第二位俊成・後鳥羽院の三四首、第三位家隆の三三首、第四位定家の三一首、第五位慈円の三〇首、第六位順徳院の二八首、第七位が寂蓮・土御門院の二五首である。新古今歌人を重視している。

撰集資料は、定数歌、『堀河百首』『久安百首』『正治二年院初度百首』『建保四年後鳥羽院百首』『洞院撰政家百首』『宝治百首』、『仙洞句題五十首』『道助法親王家五十首』。歌合歌、『六百番歌合』『千五百番歌合』『内裏十首歌合』『内裏百番歌合』、『治承三十六人歌合』『御裳濯川歌合』、その他私家集等の作品を中心としている。

伝本は、拙著⁽¹²⁾において、国立公文書館内閣文庫蔵本（特9・11）、同文庫蔵本（200・224）、宮内庁書陵部蔵本（155・137）、彰考館文庫蔵本（巳四）、群書類従本（巻一五二）を掲載したが、その他、高松宮家蔵本（現在、国立歴史民俗博物館蔵、H—600、714・463）、ノートルダム清心女子大学蔵本（D173）、加藤正治氏旧蔵本（現在、大阪青山短期大学蔵本）の諸本がある。拙著の本文の底本は、内閣文庫蔵本（特9・11）に拠った。本稿では同本を底本とした、『新編国歌大観⁽¹⁰⁾』の本文に拠る。

寂蓮の入集歌は二六首ある。以下入集番号を記す。巻一・春上・二〇、巻二・春中・一四八、巻三・春下・二一六、巻四・夏・三四九、同・三五八、同・三六六、同・三七一、巻五・秋上・四四〇、巻六・秋中・五四二、同・五六三、巻七・秋下・六五七、同・七二八、巻八・冬・七四四、（同・七六〇）、作者表記寂蓮とあるが、寂然歌）、同・七六二、同・七八七、同・八〇二、同・八二五、同・八二九、同・八四四、同・八七一、巻九・賀・九二二、同・九二二、同・九二三、巻十・羈旅・九三九、同・九五二番歌である。以上の内、巻八・冬・七六〇番歌は、現存諸本すべて「寂蓮法師」と作者表記するが、^(8.A.D.E)大伏春美氏の調査に拠ると、

760 寂然Ⅲ五四、治承三十六人歌合一三三、寂然、歌仙落書九七同前、万代集一三六二「故郷落葉を」同前、宝物集三七

○同前 ※雲葉集は寂蓮法師

とあり、寂然歌である。その一首を除くと二五首となり、二一首は他の撰集等に入集しており、独自歌は四首となる。以下その和歌を示す。

巻八・冬歌

百首歌よみ侍りしに

寂蓮法師

七八七 しもさゆるかりたのおもやはらふらんまださよふかししぎのはねがき

（家十首歌合侍りけるに、旅泊千鳥）

寂蓮法師

八〇二 みやこおもふゆめぢよしばしとも千鳥こゑはまくらにちかのうらかぜ

(百首御歌の中に)

寂蓮法師

八二九 さゆる夜のそらより風のみずびきてこほれるあめやあられなるらん

卷十・鞆旅歌

後京極摂政家十首歌合に、秋旅

寂蓮法師

九五二 あふさかをこえだにはてぬあき風にすゑこそおもへしらかはのせき

以上の内、九五二番歌はこの『雲葉集』初出の和歌であるが、後の『続古今和歌集』(卷十・鞆旅・九五二番)『六華和歌集』(卷三・秋・六五八番)『歌枕名寄』(卷二七、白河関、七〇六三番)『類題和歌集』(卷二五)等に入集しており、拙稿⁽¹³⁾『続古今集』の項で考察を加えたので、本稿では省略する。その項を参照いただきたい。

先ず七八七番歌についてみる。

しもさゆるかりたのおもやはらふらんまださよふかししぎのはねがき

この歌の詠歌年時、出典についてみる。詞書に「百首歌よみ侍りしに」とあるが、寂蓮の詠進した百首歌は以下の八箇度ある。

- (一) 後徳大寺実定家結題百首
- (二) 無題百首
- (三) 西行勸進二見浦百首
- (四) 殷富門院大輔勸進百首
- (五) 結題百首
- (六) 左大将良経邸花月百首

(七) 左大将良経邸十題百首

(八) 正治二年院初度百首

以上の如くある。定数歌については拙著⁽²⁾を参照されたい。

『雲葉集』『冬歌』中の「霜」(七八六〜七八九番)の歌題を詠んだ二首目に配列されている。前掲の定数歌の内「霜」を歌題(歌材)として詠んでいる百首歌について検討する。(一)『無題百首』、(五)『結題百首』、(八)『正治二年院初度百首』の三種は百首が完存しており、該当しないので除外する。(一)『後徳大寺実定家結題百首』、(三)『西行勸進二見浦百首』、(四)『殷富門院大輔勸進百首』、(六)『左大将良経邸花月百首』、(七)『左大将良経邸十題百首』の五種は元来証本が存在しなかったのか、もしくは散佚したのか証本がなく、寂蓮歌は一部の詠歌のみしか集成することができない。他歌人の良経・慈円・家隆・定家の諸家集にはそれぞれの百首が現存しているので、歌題(歌材)を検討し、何れの定数歌に該当するかを考察する。

(一)『後徳大寺実定家結題百首』については、森本元子⁽¹⁴⁾・松野陽一⁽¹⁵⁾両氏の考察があり、松野氏に拠って詠歌が集成されており、その歌題に拠った。その他の定数歌については、前掲の歌人の家集の歌題(歌材)に拠った。

以上の五種の定数歌の内、(六)『花月百首』は「花・月」の各五十首を歌題として詠んでおり該当しない。

(一)『実定家結題百首』の歌題には「霜」を詠んだ詠歌は集成されていない。(三)『二見浦百首』は慈円・定家の百首のみ完存し、定家『拾遺愚草上』の「二見浦百首」(冬・一五三番)に「霜」を歌材として詠んでいる。慈円『拾玉集』の「御裳濯百首」には詠まれていない。(四)『殷富門院大輔勸進百首』は公衡・家隆・定家の百首のみ完存し、公衡⁽¹⁶⁾の「殷富門院大輔百首」(冬・四一・四三番)、『壬二集』の「殷富門院大輔百首」(二四二・二四三番)、『拾遺愚草上』の「皇后宮大夫百首」(冬・二四二・二四六番)に「霜」を歌材として詠んでいる。(七)『十題百首』は良経・慈円・定家の百首のみ完存し、『秋篠月清集』の「十題百首」「天象部」(二〇九番)に「霜」を歌材として詠んでいる。慈円『拾玉集』の「拾題十首和歌」、定家『拾遺愚草上』の「十題百首」には詠まれていない。以上(一)(三)(四)(七)の定数歌の内の何れかかと思われるが決定し難く詠歌

年時、出典は未詳とする。

歌意は、霜が冷たく置いてある夜、稲を刈りとったあとの田の面を払っているのであろうか。まだ夜が深いのに、鳴が羽搔をしていることよ。

寂蓮歌と同趣向の歌として、後の『為家千首』（九五三番）に入集している、しもさゆるかりたのおもにきこゆなりねざめもよほすしぎのはねがき

の歌があり、寂蓮歌の初句、第二句、結句と同一の句を用い、同趣向の歌であり、影響を承けているかと思われる。

また、『拾遺愚草上』「重奉和早率百首文治五年三月」（雑・五九五番）に入集している、

おきふしに音ぞなかけける霜さゆるかり田の庵の鳴の羽がき

の歌があり、寂蓮歌の初句、第二句、結句と同一の句を用い、同趣向の歌であり、影響関係があるかと思われる。

次に八〇二番歌についてみる。

みやこおもふゆめぢよしばしとも千鳥こゑはまくらにちかのうらかぜ

この歌の詠歌年時、出典についてみる。詞書に「家十首歌合侍りけるに、旅泊千鳥」とある。この歌合の従来の研究については、久保田淳・片山享⁽¹⁸⁾・青木賢豪・拙著⁽²⁰⁾等の各氏に拠って考察されている。この歌合は正治元年（一一九九）十二月に良経の主催によるものであり、『左大臣家冬十首歌合』と称されている。

歌題は、寒樹交松・池水半氷・山家夜霜・関路雪朝・水鳥知主・旅泊千鳥・鞆中晚嵐・湖上冬月・爐辺懷旧・契歳暮恋の十題。

歌人は、良経・兼実・定家・家隆・隆信・殷富門院大輔・寂蓮等である。

寂蓮の詠歌は、この『雲葉集』を初出とし、後の『夫木和歌抄』（卷十七・冬部二、千鳥、六八九八番）に入集している。「旅泊千鳥」題の一首を見いだすことができる。

歌意は、千賀の浦の旅の宿りの夢の中で都のことを思い起こしていると、少しの間群れている千鳥の鳴く声が枕元近くに聞こえ浦風が吹くなあ。

千賀の浦は、片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典』（昭和58年12月、角川書店）の同項目に拠ると、

陸奥の歌枕。陸前国、今の宮城県宮城郡、松島湾の南西部の海岸、塩釜の浦のことである。「千賀の塩釜」とよまれることが多く、「近し」と掛詞にした表現が一般的なよみ方であった。（下略）

とある。寂蓮歌も「千賀の浦」と「近し」を掛詞にして詠んでいる。

次に八二九番歌についてみる。

さゆる夜のそらより風のむすびきてこほれるあめやあられなるらん

この歌の詠歌年時、出典についてみる。詞書に「(百首御歌の中に)」とあるが、寂蓮の詠進した百首歌は前掲七八七番歌の如く八箇度ある。以下同様の方法で検討するので該当の項を参照されたい。

『雲葉集』には「冬歌」中の「霰」（八二八・八二九番）の歌題を詠んだ二首中の一首として配列されている。前掲の定数歌の内「霰」を歌題（歌材）として詠んでいる百首歌について検討する。

- (一)『実定家結題百首』の歌題には「霰」を詠んだ詠歌は集成されていない。(二)『二見浦百首』において定家『拾遺愚草上』の「二見浦百首」（冬・一五七番）に「霰」を歌材として詠んでいる。慈円『拾玉集』の「御裳濯百首」には詠まれていない。(三)『殷富門院大輔勸進百首』において定家『拾遺愚草上』の「皇后宮大輔百首」（冬・二四四番）に「霰」を歌材として詠んでいる。公衡『殷富門院大輔百首』、家隆『壬二集』の「殷富門院大輔百首」には詠まれていない。(四)『左大将良経邸花月百首』は「花・月」の各五十首を歌題として詠んでおり該当しない。(五)『左大将良経邸十題百首』(天部・七〇九)に「霰」を歌材として詠んでいる。慈円『拾玉集』の「拾題十首和歌」には詠まれていない。

以上の内七『左大将良経邸十題百首』の良経歌、

あまのがはこほりをむすぶいはなみのくだけてちるはあられなりけり

この歌は寂蓮歌と発想が類似し同趣向の歌と思われる。『十題百首』の寂蓮歌は百首が完存していなく、「天象部」は「月・星・霜・雲・虹」の五首を他撰集より集成した。拙著⁽²⁾該当の項を参照されたい。「霰」題を詠んだ歌はなく、可能性は認められるが、確証はなく、従って詠歌年時、出典は未詳とする。

歌意は、冷えこんだ夜の空より吹く風が凝って、氷った雨が霰となることだろうか。

寂蓮歌と同趣向の歌として、後の『為家五社百首』（あられ、四〇七番）に入集している、あまのがはくものしがらみこす浪のこほれるたまやあられなるらん

の歌があり、寂蓮歌の下句と同一もしくは類似の句を用い、影響を承けているかと思われる。

寂蓮歌は後の『夫木和歌抄』（卷十七・冬部二、霰、七二二八番）にも入集している。

三『拾遺風躰和歌集』

この作品の従来の研究については、石田吉貞⁽²¹⁾・濱口博章⁽²²⁾・福田秀一⁽²³⁾・谷鼎⁽²⁴⁾・峯村文人⁽²⁵⁾・井上宗雄⁽²⁶⁾・有吉保⁽²⁷⁾・中川博夫⁽²⁸⁾・大島貴子⁽²⁹⁾・斎藤彰⁽³⁰⁾・拙著⁽³¹⁾等の各氏に拠って考察されている。撰者、書名、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

撰者は、冷泉為相と推定されている。

為相は、弘長三年（一二六三）に生まれ、嘉暦三年（一二三二）八月十七日、六六歳で没した。父は正二位権大納言為家。母は阿仏尼。正二位権中納言に至る。建治元年（一二七五）為家没後、阿仏尼と為氏との間に細川荘の訴訟が起こり、弘安・正応の頃から訴訟のこともあり、鎌倉との往反が頻繁になり、以後関東で指導的地位を築いた。正応五年（一二九二）

『貞時勸進三島社十首』、嘉元元年（一三〇三）『仙洞百首』、伏見院主催の『仙洞五十番歌合』以下京極派の歌合に出席。文保二年（一二三二）『文保百首』にも加わった。『拾遺風躰和歌集』と共に『柳風和歌抄』（延慶三年・一三一〇）の撰者と推定されている。家集『藤谷和歌集』は後人の撰。『新後撰和歌集』以下の勅撰集に六四首入集している。

書名は、撰者と推定されている為相が延慶元年（一二三〇）一二月に侍従を兼ねているので、その唐名の拾遺にちなむ。また、『続拾遺和歌集』までの勅撰集に入集していない歌が収められているから、「拾遺」には文字通り、勅撰に漏れた歌を集めたとの意味も含まれているのであろう。との説もある。⁽²⁹⁾

成立は、所収歌人の位署、「式部大夫広範卿・式部大夫広範卿女・藤原頼基朝臣」、「権中納言公雄卿」等から、正安四年（十一月二二日、乾元と改元、一三〇二）七月二二日以後、嘉元元年（八月五日、乾元二年を改元、一三〇三）十二月以前と推定されている。

内容、部立は、春（四五首）・夏（三六首）・秋（六四首）・冬（四五首）・賀（一五首）・哀傷（一五首）・離別（二三首）・羈旅（三二首）・恋（七九首）・雑（一二六首）・神祇（一四首）・釈教（三九首）の十卷、五三三首から成る。

入集歌人は、新古今時代以降より当代までを中心とし、弘法大師、好忠、和泉式部等の歌を撰入する。第一位は撰者為相の父為家で一七首、第二位は第六代將軍の宗尊親王の一六首、第三位は同親王の幕下公朝・定家の各一五首、第四位は家隆・隆祐父子の各一四首、第五位は寂蓮・為相・光俊の各十首である。

撰集資料は、定数歌、『正治二年院初度百首』『弘長百首』『弘安百首』。歌合歌、『六百番歌合』『千五百番歌合』『春日社歌合』『建長六年百首歌合』、その他私家集等の作品を中心としている。

伝本は、一 広本系統 続群書類従本（卷三七〇）、国立公文書館内閣文庫蔵A本（200・216）、同文庫蔵B本（200・227）、島原市立図書館松平文庫蔵本（130・7）、宮内庁書陵部蔵本（155・229）、高松宮家蔵本（現在、国立歴史民俗博物館蔵、H—600、

1288・99)、慶応義塾図書館蔵本(128・170)、有吉保氏蔵本。二 抄出本系統 島原市立図書館松平文庫蔵本(130・8)、北野天満宮蔵本、彰考館文庫蔵A本(巳四)、同文庫蔵B本(巳五)の諸本がある。拙著⁽³¹⁾の本文の底本は、有吉保氏蔵本に拠った。本稿では同本を底本とした、『新編国歌大観』^(27・B)の本文に拠る。

寂蓮の入集歌は『新編国歌大観本』に拠ると以下の一二首である。以下入集番号を記す。春・二三、夏・六二、秋・一〇五、冬・一六七、同・一八四、賀・二〇一、恋・二九二、同・三一七、同・三四八、雑・三七五、同・三八〇、釈教・五二五番歌である。以上の内、恋・二九二番歌は、

不逢恋

寂蓮法師

しぬばかり思ふといへどめにみえぬ心なればや人のたのめぬ

とあり、作者名は前掲の諸本すべて「寂蓮法師」とするが、『新統古今集』(巻十四・恋四・一三八二番)に、

恋歌の中に

寂身法師

しぬばかり思ふといへどめにみえぬ心なればや人のたのめぬ

とあり、作者名は「寂身法師」である。『勅撰作者部類』の「寂身」の項に、「法師俗名周防守。能蓮法師子、家集あり、新統古一三八二」とある。『寂身法師集』には入集していないが寂身法師歌と思われる。

また、雑・三七五番歌は、

山家月

寂蓮法師

いつまでかかくても独山ざとの松のあらしの月にふく夜と

とあり、『新編国歌大観本』は作者名「寂蓮法師」とする。前掲諸本の内、統群書類従本、内閣文庫蔵B本(200・227)、書陵部蔵本は同様である。それ以外の諸本は作者名を「寂恵法師」とする。

また、雑・三八〇番歌は、

擣衣

寂蓮法師

かくばかり夜を長月のから衣人やかはりてうちあかすらむ

とあり、『新編国歌大観本』は作者名「寂蓮法師」とする。前掲諸本の内、続群書類従本は同様であり、内閣文庫蔵B本(200・227)は「寂蓮惠法」とする。それ以外の諸本は作者名を「寂惠法法師」とする。以上の二首について井上宗雄⁽³²⁾・中川博夫⁽³³⁾両氏は作者表記に異同があり、「寂惠法法師」の作とするのが有力であるとされている。拙著⁽³¹⁾『10 拾遺風躰和歌集』には前掲有吉保氏蔵本を底本として詠歌を集成したので、寂蓮歌として認定したが疑問が残る。寂蓮歌とするか、寂惠法歌とするか決定し難く、判定を保留する。

題不知

(作者名なし)

あらましの庵のと山の秋の月思ふよりまづすむ心かな(雑・三七六番)
の歌は作者名が表記されていない、前歌「寂蓮法師」を承けるものとして拙著⁽³¹⁾に集成したが、「宗親王」歌であり、訂正する。

以上、『拾遺風躰集』に二二首入集しているが、作者表記の疑問のある三首を除くと九首となり、七首は他の撰集等に入集しており、独自歌は二首となる。以下その和歌を示す。

冬歌

積雪

寂蓮法師

一八四 なびくかとしばしみえつる冬がれの萩のふるえも雪の下をれ

恋歌

恋の歌中に

寂蓮

三一七 恋ひしなばあはれとなどかいはざらん定なき世のならひばかりも

先ず一八四番歌の詠歌年時、出典についてみる。詞書に「積雪」とあり、『拾遺風躰集』の「冬歌」中の「雪」（一八〇～一八五番）の歌題を詠んだ五首目に配列されている。詠歌年時、出典は未詳である。

歌意は、靡いているのかと少しの間見えていた、冬枯の萩の枯れた古茎も積った雪の重みによって折れ伏していることよ。次に三二七番歌の詠歌年時、出典についてみる。詞書に「恋の歌中に」とあり、『拾遺風躰集』の「恋」（二七六～三五四番）中の中間に配列されている。詠歌年時、出典は未詳である。

歌意は、私が恋しさのあまり死んだならば、どうしてかわいそうだと言って下さらないだろうか。この無常の世の習いとしてだけでもよいので言って下さいね。

四『二八要抄』

この作品の従来の研究については、伊地知鐵男⁽³⁴⁾・谷鼎⁽³⁵⁾・井上宗雄⁽³⁶⁾・有吉保⁽³⁷⁾・三村晃功⁽³⁸⁾・拙著⁽³⁹⁾等の各氏に拠って考察されている。撰者、書名、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察する。

撰者は未詳である。

書名は、十六代の勅撰集から選んでいるので、十六を分けて二八としたものであろう。

成立は、嘉暦元年（一三三六）から貞和五年（正平四年、一三四九）の間と推定されている。

内容は、『古今和歌集』から『統後拾遺和歌集』に至る十六の勅撰集の中から、主として題不知、詞書のある歌を抜き出して成ったものである。

伝本は、『続群書類従』（卷三七四）本と尊経閣文庫蔵本（44・古、伝花山院師賢写）のみで、前者は恋一～八までの残欠本で歌数は約八九〇首、後者は恋一～三までのものである。

寂蓮歌は、『新古今和歌集』より三首撰出してゐる。恋一・一〇三二、恋二・一一一八、恋四・一三〇二番歌であり、独自歌はなく、既に拙著⁽²⁾において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

五 『六華和歌集』

この作品の従来の研究については、井上宗雄⁽⁴⁰⁾・三村晃功⁽⁴¹⁾・稲田利徳⁽⁴²⁾・島津忠夫⁽⁴³⁾・有吉保⁽⁴⁴⁾・山田洋嗣⁽⁴⁵⁾・田村柳壺⁽⁴⁶⁾・拙著⁽⁴⁷⁾等の各氏に拠つて考察されている。撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察する。

撰者は、由阿と推定されている。室町中期成立の『雲玉和歌抄』(馴窓編)の跋文に、

近曾万葉由阿みとて詞林採要をかき六花をあつめて定家為家のあとをけかせしかともその詠哥とて一首もみえす書あつめたるものみな本文也

とあり、島津忠夫⁽⁴⁸⁾・三村晃功⁽⁴⁹⁾・井上宗雄⁽⁵⁰⁾各氏の考察がある。

由阿は、正応四年(一二九一)に生まれ、永和元年(天授元年、一三七五)十一月以降、八五歳で没した。時宗第二世他阿上人真教の弟子となり、後年藤沢遊行寺に住んだ。貞治五年(一二六六)『詞林采葉抄』、翌年『拾遺采葉抄』、応安七年(文中三年、一三七四)『青葉丹花抄』を著した。由阿については濱口博章⁽⁵¹⁾氏の考察がある。

成立は、入集歌の『新拾遺和歌集』の成立年代である、貞治三年(正平一九、一三六四)以降かと推定されている。

内容、万葉時代から南北朝期以前に成立した、勅撰集、私撰集、私家集、歌合、定数歌、物語、説話等から撰集している。部立は、春(三六四首)、夏(二六〇首)、秋(四二七首)、冬(二六九首)、恋(二二七首)、羈旅(一一五首)、雑上(三五首)、雑下(二三二首)、神祇(六三首)、釈教(四二首)から成り、一九三四首(内十六首重出)を収録している。

入集歌は上代から南北朝期に至る三六六人の詠歌から成り、平安後期から鎌倉前期に至る歌人が多く入集し、次いで平安前期、鎌倉後期、万葉時代、南北朝期の歌人に及んでいる。第一位は家隆の一五三首、第二位定家の一四〇首、第三位良経

の九八首、第四位俊頼の六七首、第五位基家の六一首、第六位為家の五六首、第七位西行の五三首の順であり、寂蓮は第十四位で二五首入集している。家隆・基家の新出歌と思われるものが各三十一首見出しされる。

伝本は、島原市立図書館松平文庫蔵本(132・8)の孤本である。拙著の本文の底本は「古典文庫」本に拠った。本稿では『新編国歌大観』^(40・C)の本文に拠る。

この『六華和歌集』には、本書の中から難解と思われる和歌を抄出し、それに注解を付した注釈書があり、現在十四本の伝本を見ることが出来る。この書について三村晃功⁽⁵²⁾・稲田利徳⁽⁵³⁾・井上宗雄⁽⁵⁴⁾・島津忠夫⁽⁵⁵⁾・有吉保各氏の考察が成されている。

寂蓮の入集歌は、『新編国歌大観』に拠ると以下の二七首である。以下入集番号を記す。卷一・春・一二一、同・一四九、卷二・夏・五〇一、同・五二二、卷三・秋・五八三、同・六三七、同・六五八、同・七四七、卷四・冬・一〇三二、同・一二一六、(同・一三三八)、同・一三四〇、同・一三五九、同・一三六五、同・一四一三、同・一四二三、羈旅・一五四一、同・一六二七、同・一六四三、(恋)・一六四八、(卷六・雑上・一六九三)、卷七・雑下・一七五六、同・一八一四、同・釈教・一八九三、同・一九〇四、同・一九三二、同・一九三三番歌である。

以上の内、一二一六番歌は、作者表記はないが、『玉葉和歌集』(卷十六・雑三・二二六五番)『夫木和歌抄』(卷二十七・雑部九、動物部、山陵鳥、一二八八四番)『今物語』『平家物語』(卷八・山門御幸)『歌苑連署事書』等に入集しており、寂蓮歌である。

一三三八番歌は、作者表記は「寂蓮法師」となっているが、『夫木和歌抄』(卷十七・冬部二、水鳥、七〇〇七番)に入集しており、作者は「源仲正」とあり、『寂蓮集』等に入集していないが、仲正歌であろう。

一三六五番歌は、作者表記は「為家」となっているが、『寂蓮家之集』(部類本、四六番)『治承三十六人歌合』(二七二番)『夫木和歌抄』(卷十七・冬部二、水、七〇七一番)『竹園抄』(風体之事、六九番)等に入集しており、寂蓮歌である。

一五四一番歌は、作者表記は「定家」となっているが、『千五百番歌合』(春四、二百九十五番、右)『夫木和歌抄』(卷

六・春部六、三月尽、二二八一番）等に入集しており、寂蓮歌である。

一六二七番歌は、作者表記は「信実」となっているが、『夫木和歌抄』（卷三十三・雑部十五、小ぐるま、一五七〇八番）に入集しており、寂蓮歌である。『信実集』には入集していない。

一六九三番歌は、作者表記は「寂蓮法師」となっているが、『御室五十首』（祝、二八九番）『玉葉和歌集』（卷七・賀・一〇八三番）等に入集しており、作者は「俊成」とあり、俊成歌である。

一九三三番歌は、作者表記は「良暹法師」となっているが、『寂蓮集』（雑纂本、一五五番）『新古今和歌集』（卷二十・釈教・一九三八番）等に入集しており、寂蓮歌である。

以上の内、源仲正・俊成歌の二首を除き、作者表記の誤りを正すと、寂蓮歌は二五首となる。すべて他の撰集等に入集しており、独自歌はなく、既に拙著⁽²⁾において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

六 『新三井和歌集』

この作品の従来の研究については、有吉保氏⁽⁵⁷⁾の考察がある。三井寺（園城寺）関係の歌を集めた私撰集で、成立は未詳であるが、『三井集』（平安期成立の私撰集、賢辰撰、散佚）に漏れたとみられる若干の平安期の詠歌と、大部分が鎌倉時代の詠歌とみられる。有吉保氏所蔵の孤本であり、『新編国歌大観 第六卷』の本文に拠る。

卷一・春上

出家の後、三井寺にすみ侍りける比、人人歌よみ侍りけるに 沙弥寂蓮

四七 けふもまたいく山本をすぎぬらむ霞の奥に花を尋ねて

この歌は拙著^(2.A)以後の新出歌で、寂蓮は出家後嗟峨の地に庵を結んで生活をしていたことは知られているが、この詠歌によって出家後の一時期、三井寺にも居住していたことが判明した。寂蓮は花（桜）の詠歌を数多く詠んでいるが、山深く花を

求める状況の詠歌である。寂蓮の男、権律師、公猷（新古今集 339 番初出、天福元年（一二三三）二月二十日入滅）。昌観（本名尚観）も三井寺の僧となっている。

ここで以上のまとめをする。本稿で採りあげた私撰集の『雲葉集』には二六首入集し、その内の七六〇番歌は現存諸本すべて「寂蓮法師」と作者表記するが、寂然歌であり、その一首を除くと二五首となる。二一首は他の撰集等に入集しており、『雲葉集』のみ入集の独自歌は四首となる。『拾遺風躰集』には一二首入集し、その内の二九二番歌は現存諸本すべて「寂蓮法師」と作者表記するが、寂身歌であり、三七五・三八〇番歌は諸本に拠り、「寂蓮法師」、「寂恵法師」とあり、作者表記に疑問があり、以上の三首を除くと九首となる。七首は他の撰集等に入集しており、『拾遺風躰集』のみ入集の独自歌は二首となる。『二八要抄』には三首入集し、すべて『新古今集』入集歌であり、独自歌はない。『六華和歌集』には二七首入集し、その内の一三三八番歌は作者表記は「寂蓮法師」とするが、源仲正歌であり、一六九三番歌は作者表記は「寂蓮法師」とするが、俊成歌である。以上の二首を除くと二五首となる。すべて他の撰集等に入集しており、独自歌はない。『新三井和歌集』には一首入集している。

本歌取歌、影響歌については、『雲葉集』の七八七番歌は『為家千首』（九五三番）の為家歌に影響を与えているか。また、『拾遺愚草上』（五九五番）の定家歌とは影響関係があるかと思われる。『雲葉集』の八二九番歌は『左大将良経邸十題百首』（二〇八番）の良経歌と影響関係がうかがわれ、『為家五社百首』（四〇七番）の為家歌には影響を与えているかと思われる。以上の如く寂蓮没後の私撰集に数多く入集し、独自歌について考察してきたがそれぞれの時代において評価されていたことをうかがうことができる。

注

(1) (A) 拙稿「寂蓮の私撰和歌集入集歌について―『言葉と歌集』『月詣和歌集』『玄玉和歌集』『万代和歌集』を中心として―」（『二松学舎大学論集』第41集、平成10年3月）。

- (B) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について——「四季部」所収歌を中心として——」〔語文〕第99輯、平成9年12月。
- (C) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について——「雑部」所収歌を中心として——」〔語文〕第100輯、平成10年3月。
- (2) (A) 拙著『寂蓮法師全歌集とその研究』(昭和50年3月、笠間書院)。
 (B) 拙著『寂蓮の研究』(平成8年3月、勉誠社)。
- (3) 久曾神昇「鎌倉時代の私撰集に就いて——秋風抄・雲葉集・明玉集——」〔書誌学〕第10巻・第2号、昭和13年2月。
- (4) (A) 安井久善「類従本雲葉和歌集の誤綴について」〔古典論叢〕第2号、昭和26年9月。
 (B) 同「雲葉和歌集」〔和歌文学大辞典〕、昭和37年11月、明治書院。
- (5) (A) 樋口芳麻呂「雲葉和歌集卷十一以降の和歌について」〔愛知学芸大学国語国文学報〕第12集、昭和35年11月。
 (B) 同「雲葉和歌集」〔群書解題〕第7巻、和歌部(一)、昭和36年7月、続群書類従完成会。
 (C) 同「雲葉和歌集」〔和歌大辞典〕、昭和61年3月、明治書院。
- (6) 有吉保編『和歌文学辞典』(昭和57年5月、桜楓社) 所収「雲葉和歌集」の項。
- (7) (A) 黒田彰子「歌人藤原基家の初期——雲葉集編纂までの活動——」〔和歌文学研究〕第42号、昭和55年4月。後に『中世和歌論攷 和歌と説話と』(平成9年5月、和泉書院) 所収。
 (B) 同「藤原基家の後期」〔国語と国文学〕、昭和57年9月。後に前掲書に所収。
- (8) (A) 大伏春美「雲葉和歌集と私家集」〔和歌文学新論〕森本元子編、昭和57年5月、明治書院。
 (B) 同「雲葉和歌集について——歌人構成と撰集資料を中心として——」〔和歌文学研究〕第46号、昭和58年2月。
 (C) 同「内閣文庫本雲葉和歌集巻七・八翻刻と校異」〔語文〕第57輯、昭和58年5月。
 (D) 同「新編国歌大観本雲葉和歌集作者索引」〔徳島文理大学研究紀要〕第44号、一九九二年三月。
 (E) 同「雲葉和歌集」他出文献一覽(上・下)〔徳島文理大学研究紀要〕第45号、一九九三年三月。第46号、一九九四年三月。
- (9) 佐藤恒雄「雲葉和歌集」〔日本古典文学大辞典 第一巻〕、一九八三年一〇月、岩波書店。
- (10) 後藤重郎・安田徳子「雲葉和歌集」〔新編国歌大観 第六巻 私撰集編Ⅱ〕、昭和63年4月、角川書店、翻刻と解題。
- (11) 池尾和也「続古今和歌集」生成論の試み——反御子左派私撰集重出歌を手掛かりにして——〔花園大学国文学論集〕19、平成3年11月。
 注2 A 拙著、本文編V 6 雲葉和歌集。研究編第一章・V 6 雲葉和歌集。
- (12) 拙稿「『寂蓮集』の撰集抄出歌をめぐる——『新勅撰集』より『新後撰集』を中心として——」〔二松学舎大学 人文論叢〕第58輯、平成9年3月 74頁〜75頁。
- (14) 森本元子「私家集の研究」(昭和41年11月、明治書院) 255頁〜256頁。
- (15) 松野陽一「後徳大寺実定結題百首考」〔東北大学教養部紀要〕第33号、昭和56年2月。後に『烏帯 千載集時代和歌の研究』(平成7年11月、風間書房) 所収。
- (16) 『続群書類従 第三十七輯』、「巻三百九十八、和歌部三十三 殷富門院大輔百首」、校訂 橋本不美男・佐藤恒雄の本文に拠った。
- (17) 久保田淳『藤原家隆集とその研究』(昭和43年7月、三弥井書店) 474頁。

- (18) (A)片山享『校本 秋篠月清集とその研究』(昭和51年6月、笠間書院)。681～682頁。
 (B)同『左大臣家冬十首歌合』(『和歌大辞典』、昭和61年3月、明治書院)。
- (19) 青木賢豪『藤原良経全歌集とその研究』(昭和51年8月、笠間書院)。274頁。
- (20) 拙著。注2 Aの拙著。476頁。
- (21) 石田吉貞『宇都宮歌壇とその性格』(『国語と国文学』、昭和22年12月)、後に『新古今世界と中世文学(下)』(昭和47年12月、北沢図書出版)、第四編・第四宇都宮歌壇とその性格に所収。
- (22) 濱口博章『鎌倉歌壇の一考察―拾遺風躰和歌集・柳風和歌抄について―』(『国語国文』、昭和29年7月)、後に『中世和歌の研究 資料と考証』(平成2年3月、新典社)、研究篇、30頁～42頁に所収。
- (23) (A)福田秀一『延慶両卿訴陳状の成立』(『国語と国文学』昭和32年7月、後に『中世和歌史の研究』(昭和47年3月、角川書店)、第二篇・第五章に所収。
 (B)同『暁月房為守の経歴と作品』(『国語と国文学』、昭和34年6月)、後に前掲書、第二篇・第六章に所収。
- (24) 谷鼎『拾遺風躰和歌集』(『群書解題』第9巻、和歌部(三)、昭和35年11月、統群書類従完成会)。
- (25) 峯村文人『拾遺風躰和歌集』(『和歌文学辞典』)。
- (26) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』(昭和40年11月、昭和61年5月、改訂新版、明治書院)、第二編・第二章・5、拾遺風躰集、138頁～142頁。
- (27) (A)有吉保編『和歌文学辞典』所収「拾遺風躰和歌集」。
 (B)同『拾遺風躰和歌集』(『新編国歌大観 第六巻』、翻刻と解題)。
- (28) (A)中川博夫『拾遺風躰和歌集―統群書類従活字本の成立課程』(『三田国文』1、昭和58年1月)。
 (B)同『拾遺風躰和歌集について―諸本と成立―』、和歌文学会、昭和六十二年十一月例会発表。後に『和歌文学研究』第56号、昭和63年6月、「例会発表要旨」に掲載。
- (C)同『拾遺風躰和歌集』の成立追考」(『中世文学研究』第21号、中四国中世文学研究会、平成7年8月)。
- (29) 大島貴子『拾遺風躰和歌集』(『日本古典文学大辞典 第三巻』、一九八四年四月)。
- (30) 斎藤彰『拾遺風躰和歌集』(『和歌大辞典』)。
- (31) 注2(A)拙著、本文編V 10拾遺風躰和歌集、研究編 第一章・V 10拾遺風躰和歌集。
- (32) 井上宗雄。注26の著書。写本により語句・作者名の異同が少なくない事であるとして、統類従本により例示され、私見として、「(2) 寂恵・寂蓮のまぎらわしい所は寂恵がよいようである。」とされている。
- (33) 中川博夫、注28・Cの論。72頁上「注(29)」において、「作者 寂恵」が有力と判断しておく。」とされている。
- (34) 伊地知鐵男『二八要抄』(『和歌文学大辞典』)。
- (35) 谷鼎、『二八要抄』(『群書解題』第9巻、和歌部(三)、185頁)。
- (36) 井上宗雄、注26の著書。第一編・第四章・14、二八要抄・二八明題集、346頁。
- (37) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「二八要抄」の項。
- (38) 三村晃功『二八要抄』(『和歌大辞典』)。

- (39) 拙著、注2 A、本文編V 8 二八要抄、研究編 第一章・V 8 二八要抄
- (40) (A) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』(昭和40年11月、昭和62年5月、改訂新版、明治書院)。第三編・第八章・9、678頁。補注篇、916頁、917頁。
 (B) 井上宗雄・三村晃功・稲田利徳・島津忠夫編『六花和歌集』(古典文庫303、昭和47年8月)。
 (C) 井上宗雄・山田洋嗣『六華和歌集』(『新編国歌大観 第六卷 私撰集編Ⅱ』、翻刻と解題)。
- (41) (A) 三村晃功『六花集の研究』(昭和45年8月、私家版)。
 (B) 同注40 Bの著書。
- (42) (C) 同『六華和歌集をめぐって』(岡山大学国文学論稿)第3号、昭和48年3月)。
 (D) 同『中世和歌拾遺(1)―六花和歌集・明題和歌全集所収の新出歌をめぐって―』(『中世文学研究』、創刊号、中四国中世文学研究会、昭和50年7月)。
 (E) 同『六花和歌集』(『和歌大辞典』)。
- (43) 島津忠夫、注40 Bの著書。
- (44) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「六花和歌集」の項。
- (45) 山田洋嗣、注40 Cの著書。
- (46) 田村柳壺『六華和歌集』(『松平文庫影印叢書、第一卷、私撰集編』平成5年7月、新典社)、影印と解題。
- (47) 拙著、注2 A、本文編V 9 六花和歌集、研究編 第一章・V 9 六花和歌集。
- (48) (A) 島津忠夫「和歌と説話と―雲玉和歌抄をめぐって―」(『国語国文』、昭和43年3月)。後に、『和歌文学史の研究 和歌編』(平成9年6月、角川書店)所収。
- (49) (B) 島津忠夫・井上宗雄編『雲玉和歌抄』(古典文庫248、昭和43年3月)。
- (50) 三村晃功『岡山大学所蔵『六花抄』について』(『国語国文』、昭和44年8月)。
- (51) 井上宗雄、注40(A)の著書、678頁。注48 Bの著書。
- (52) (A) 濱口博章、注22の著書、研究篇、由阿の伝について、299頁、305頁。
 (B) 同「由阿」(『和歌大辞典』)。
- (53) (A) 三村晃功『六花集の性格と価値』(『国語国文』、昭和46年9月)。
 (B) 三村晃功・稲田利徳・井上宗雄・島津忠夫編『六花集注(彰考館本)』(古典文庫328、昭和49年7月)。
 (C) 三村晃功・稲田利徳・井上宗雄・島津忠夫編『六花集注(蓬左文庫本)』(古典文庫363、昭和52年1月)。注40 Bの『六花和歌集』の解題、作者・出典一覧、初句索引等を付す。
 (D) 三村晃功『六花集注』(『和歌大辞典』)。
- (54) 稲田利徳、注52 B・Cの著書。
- (55) 井上宗雄、注52 B・Cの著書。
- (56) 島津忠夫、注52 B・Cの著書。

- (56) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「六花集注」の項。
- (57) (A) 有吉保「『新三井和歌集』の考察―収載の新資料について―」(池田富蔵博士古稀記念論文集、『和歌文学とその周辺』、昭和58年12月、桜楓社)。
(B) 同「新三井和歌集」(『新編国歌大観 第六卷』)、翻刻と解題。